

# 松江歴史館における 中・近世考古関係の展示について

岡崎 雄二郎

## 1. はじめに

平成 23 年 3 月 19 日に開館した松江歴史館は、江戸時代に特化した歴史系博物館である。大半の歴史博物館が、原始・古代から近世・近代に至るいわゆる通史を解説する施設であるのに対し、当博物館は、基本展示では江戸時代の史料や事物を中心にし、企画展示では戦国時代から昭和 30 年代までをその対象範囲としている。

なぜ、江戸時代に特化したのか。それは基本構想の策定にあたり、「今の私たちの暮らしぶりは、基本的に江戸時代以来の知恵と工夫を基礎としていることであり、松江の歴史・文化を現在から未来へと継承していく上では、江戸時代の松江を知ることは欠かすことができない」という基本理念に基づいている。

そして、博物館の立地も城下町松江にふさわしい場所ということで、全国に現存する 12 の天守の一つである松江城天守の屹立する城山公園の内堀を隔てたすぐ東側の民有地に建設することになった。お城と博物館を一体的に見学し、大勢の市民や観光客に城下町松江を強く印象づけようとする意図がある。

建設予定地は、江戸時代の各種絵図によれば家老屋敷街であったことが知られていた。そこで、平成 18（2006）～同 20 年度にかけて発掘調査を実施した。調査の結果、後述するように各期の様々な遺構、遺物が良好な状態で発見された。研究者団体から現状保存を求める要望が相次いだが、最終的に遺構の地下保存に努めることと調査の成果を展示に活かすことで決着をみた。

基本展示室は、既に実施設計を終えており大幅な変更は困難であったが、展示業者をまじえた内部協議を積み重ね、壁面や床面を工夫して最大限表現できるように調整した。

以下、参考とした絵図資料と発掘調査の概要を述べ、その成果に基づく考古関係の展示について紹介したい。

## 2. 絵図に見る江戸時代のようす

建設地は、殿町の北西部一帯の土地 5,453 m<sup>2</sup>である。江戸時代の各種絵図を見ると、南北に長い長方形の一街区には、5～11 軒の家老・重臣屋敷があったことが分かる。堀尾期、



発掘調査の様子

京極期、松平期のいずれの時期も重臣・家老が住み、すぐ西側の内堀には城内への横からの出入り口となる脇虎口ノ門（東ノ惣門）や北惣門橋と呼ばれた橋があった。

建設予定地は、一番北側にあつて堀尾期には北側に堀尾采女<sup>うねめ</sup>、南側に堀尾右近<sup>うこん</sup>、京極期には佐々九郎兵衛、松平期には北側に乙部九郎兵衛、南側に朝日丹波が居住していた。屋敷地は、東、北、西の三方が道路に面している。敷地面積は、『松江城下武家屋敷明細帳』に間口などが記載されており、計算するとほぼ7,000 m<sup>2</sup>（約2100坪余）となる広大な敷地であつたことが知られる。

家老・重臣屋敷の内、有澤家、脇坂家については、屋敷絵図が現存しており、敷地内の建物配置がよく分かる。この内、有澤家の敷地を見てみよう。西側に道路があり、中央やや南寄りに表門がありその両側から直角に折れた南辺、北辺にかけて長屋があり「与力」が住んでいた。主屋は表門から斜めに敷いてある石畳を入った敷地の中ほどにある。数にして40以上の部屋が複雑に連なった間取りである。裏側東方には土蔵や納屋などの附属建物が、主屋の南東部には、座敷、書院、囲い（茶室）、庭園が配置されている。

かかる建設予定地に該当する屋敷絵図は無いので詳細は不明であるが、三方が道に面しているの、必ずしも既存の屋敷絵図のと通りの建物配置ではないと考えた。

### 3. 発掘調査で発見された主な遺構と遺物

平成18年度から20年度にかけて実施された「松江歴史館」建設予定地の発掘調査は、松江市内の城下町遺跡の調査面積としては最大の4,100 m<sup>2</sup>であつた。以下、年代の古い順に概要を記す。

#### 0期—松江城始築時—17世紀初頭

遺構は、鉄滓<sup>てっさい</sup>、断面方形の羽口<sup>はぐち</sup>などを出土した鍛冶遺構1。松江城築城工事に関係する鉄鍛冶の作業場があつたのであろうか。

#### I期—松江城と城下町の建設時—17世紀初頭～前半

素掘りの大溝によって、北と南の屋敷地に区画されていた。大溝は屋敷割を行った際の境界として、排水機能も兼ねたものであつた。

大溝の北にあつた北屋敷は、堀尾采女4000石の屋敷地で、遺構面は水はけのよい黄色の山土を盛って造成している。

遺構は、北側道路沿いに「長屋」があり、最南部に平面ひょうたん形の池跡（東西約13.5×南北約7.0m、深さ0.9～1.2m）が発見され、西側の方形の池（東西約3.4m×南北約4.6m、深さ約0.8m）と鑕水<sup>やりみず</sup>（導水施設）で接続されていた。池に面した北側には廻り縁や渡り廊下をもつ「客間」的な礎石建物跡（東西9間×南北4間）があつた。一方渡り廊下の南側には「離れ」のような建物跡があつた。礎石建物跡の東側には花壇が、池の南側には築山があつたと考えられている。

大溝の南にあつた南屋敷は、堀尾右近500石の屋敷地で、遺構面は、大溝を掘削した残土（黒色粘土、灰色シルト土、青灰色シルト土）を盛っている。

遺構は素掘りの大溝2、石積方形土坑2、畠跡1、庇付きの主屋や台所をもつ「離れ」的な建物跡など4、竹の管を使った導水施設1がある。

主な遺物は、北屋敷の第4遺構面では肥前陶器（絵唐津の皿や碗）、中国磁器（青花、漳州窯系五彩<sup>しょうしゅうよう</sup>

大皿)、志野、織部の碗、備前播鉢、灯明皿、漆器椀、下駄、羽子板、墨書木簡、舟形木製品等がある。

南屋敷の第4遺構面では肥前陶器(胎土目跡の皿、絵唐津)、中国磁器(青花の碗・皿)、祭祀具(王神宮ほかの墨書あり)、木簡、漆器、箸、折敷<sup>おしき</sup>、人形、瓦などがある。

## Ⅱ期—京極忠高～松平直政——17世紀前半～17世紀中頃

屋敷境は、素掘りの大溝が埋められ掘立柱の塀が作られる。その後松平期に入ると再度溝が掘られ、2～3段に積まれた石積み側溝となる。

北屋敷は、京極期には重臣左々九郎兵衛の、松平期には家老乙部家の屋敷地であった。20～40 cmの盛り土を施し、遺構は、堀尾期からの池を改修しながら利用したひょうたん型の池1、鍵水1、方形の池1、池1、建物跡2、渡り廊下1、長屋跡と思われる礎石列3、「佐々九郎兵衛」銘の木簡が見つかった廃棄土坑1が確認された。北部では、古絵図に見える鍵手の状の屋敷の端に相当する3段積みの石垣1、長屋2、礎石建物1があった。

南屋敷は、佐々九郎兵衛の屋敷地だったが、松平初期になると朝日丹波が入ってくる。遺構面はさらに20 cmほど黄色の山土などを盛っている。

遺構は、屋敷境のすぐ南にあった長屋2をはじめとする礎石建物跡5、石積方形土坑5、礫敷遺構3、細い竹を地面に方形に刺した木舞状遺構<sup>こまい</sup>4がある。

主な遺物は、北屋敷の第3遺構面では肥前陶器の碗・砂目皿、中国磁器(青花、漳州窯系五彩大皿)、荷札木簡、下駄、羽子板などがある。

南屋敷の第3-2遺構面では肥前陶器、肥前磁器、瓦、漆器、下駄、人形3、荷札木簡などがある。

## Ⅲ期—松平直政～松平治郷ごろ——17世紀中頃～18世紀代

屋敷境はそれまで通り石積みの溝である。

乙部九郎兵衛らが居住した北屋敷の遺構面は、約20～30 cmの盛り土が施されている。遺構は、畠跡1、塀跡4、便槽2、礎石建物跡1、廃棄土坑1などを検出した。

朝日千助が居住した南屋敷の遺構面は、10 cm程度の盛り土が施されている。

遺構は、建物跡3、石積方形土坑2、石積みの溝2、廃棄土坑群2、井戸1がある。

主な遺物は、北屋敷の第2遺構面では肥前磁器(陶胎染付<sup>とうたいぞめつけ</sup>、波佐見焼<sup>はさきみ</sup>の皿)、肥前陶器(碗、皿)、墨書木材、下駄、火打石などがある。

南屋敷の第3-1遺構面では肥前磁器、肥前陶器(呉器手碗<sup>ごきで</sup>)、瓦、下駄、荷札木簡、焼塩壺などがある。

## Ⅳ期—松平治郷～定安、廃藩置県後あたり——18世紀代～明治初頭

北屋敷には、松平期の後半に5代目の乙部九郎兵衛が居住したと考えられる。遺構は、屋外に設けられた石積方形土坑2、石組と木枠の井戸3、明治の初めに三之丸御殿を退去させられ、乙部家屋敷に一時期居住していた藩主松平定安の娘鑑子<sup>あきこ</sup>の胞衣<sup>えな</sup>を納めた胞衣箱埋納坑1がある。

南屋敷には、朝日千助が居住する。遺構は、建物跡2、柵列2、井戸2、祈祷具埋納土坑2がある。主な遺物は、北屋敷の第1遺構面では産地不明や肥前の磁器(広東碗<sup>かんどん</sup>、端反碗<sup>はざり</sup>)、肥前陶器(碗・皿)、在地陶器(布志名焼<sup>ふしな</sup>、御庭焼)の碗・皿、鉄球1、胞衣皿1、胞衣箱1、墨書木材、基石、狐の土人形、石製狐像、焼塩壺などがある。

南屋敷の第2遺構面では肥前磁器(陶胎染付碗、蛇の目凹型高台皿、外青磁の碗、波佐見焼の碗、

皿)、肥前陶器、焼塩壺、羽子板、瓦などがある。

南屋敷の第1遺構面〈18世紀後半～明治初頭〉では肥前磁器、長方形祈祷具1、八角形祈祷具1、鉄球1などがある。その他、多種多様な生活用具が多数出土した。

#### 4. 調査の成果を展示に活かす

##### (1) 土層はぎ取り断面による盛り土の様子と出土陶磁器の変遷 (図①)

調査の結果、江戸時代の遺構面は1面ではなく、当初湿地帯に盛り土造成された後、幕末・明治にかけて3回も分厚く盛土造成が繰り返されたことが分かった。その厚さは合わせて1m余に及ぶものである。家主の交代時に盛り土したり、地盤沈下やたび重なる洪水への対策として嵩上げしたのではないかと考えられている。

こうした新知見を展示に反映させようということから、塗調査現場の土層断面を強力なエポキシ系樹脂をガーゼに塗り込んで重ねた布に貼りつけて切り取り、それを水洗い、整形したものを壁面に取り付けた。

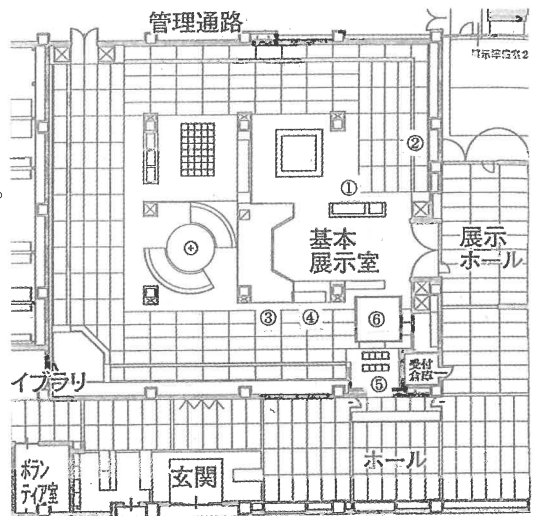
その横には、各土層の上面(遺構面)を明示し、各面から出土した陶磁器、漆器を展示した。この内、出土した漆器は水分を抜いて保存処理し、出土したそのままの形状で展示した。

又、出土漆器は、当初の姿を見せるため、実測図を基に新進気鋭の木工芸作家の濱田幸介氏に依頼して「木胎」(木地の本体)を製作していただき、漆塗りは市内の漆器店で行った。当時の素朴な紋様が再現できたと思う。

##### (2) 調査成果平面図と主な遺構の解説 (図③)

各時期によって検出遺構に変遷があるため、特徴的な「池」が機能していた時期つまり京極期から松平期の初め頃の平面図を作成し遺構の種類ごとに色分けして表示した。

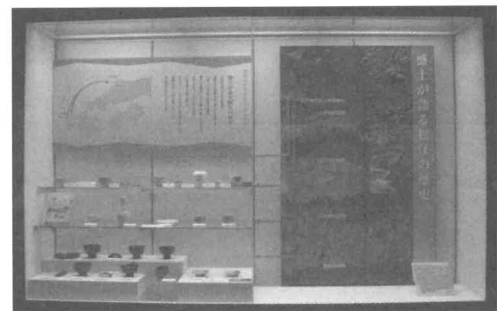
空中写真の両側には、各期の主な遺構すなわち「池跡」「礎石建物跡」「石室」「屋敷境の溝跡」「ごみ穴」「花壇状遺構」のカラー写真を配置し解説した。



基本展示室内の考古関係展示箇所



土層剥ぎ取り作業の様子



土層剥ぎ取り断面と出土品の展示



調査の概要と解説

### (3) 特徴的な出土品（図④）

おびただしい数の出土品の中でも特に目を引いたものが、茶の湯にかかわる焼き物である。茶の湯は、戦国時代の武将が盛んに好んでいたもので、堀尾吉晴も千利休から教えを乞うたといわれる。

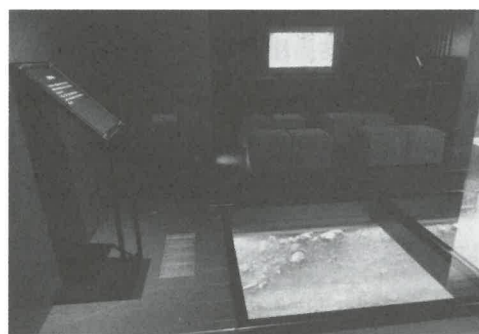
開館から平成24年10月までの期間、堀尾氏と茶の湯に関する文献の紹介と出土品の中から「黒織部<sup>くつがた</sup>沓型茶碗」「志野<sup>よほう</sup>四方碗」「志野四方色絵皿」を選びすぐって展示した。



武家のお茶道具を展示

### (4) 家老屋敷跡の発掘調査をビデオで紹介（図⑤）

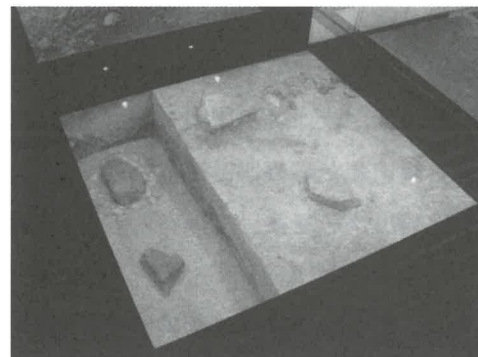
発掘調査の様子がビデオで撮影されていたので、それを含めて調査の様子や遺構、遺物を3分間の番組に構成して紹介した。特に、江戸時代の書物『松江亀田山千鳥城取立古説』の一節をクローズアップし、松江城を構築するため切り取られた山土で湿地帯が埋められ、城下町が造成されたことや調査の結果、家老屋敷の地盤は3度にわたり嵩上げ盛り土されていたことを図解入りで分かりやすく解説している。



ビデオ上映と遺構地下展示

### (5) 礎石建物跡遺構の地下展示（図⑥）

遺構を模式的に地下に展示しようというプランが決定されたのが、基本展示室の実施設計後であったため、展示場所を決めるのに苦労した。検討した結果、出口付近の床面を厚み約3cm、一辺3mの透明ガラスで覆い、深さ2mある床下を覗いて見学できるような地下ピットを設けることになった。



遺構の地下展示状況

そして、その内壁に土層はぎ取り断面を貼り付け、床面は2段として、低い段には造成当初である堀尾期の面に礎石を置いて堀尾右近の建物跡を見せている。

又、高い段には佐々九郎兵衛の屋敷があった京極期から朝日丹波の屋敷地があった松平期の初め頃の遺構面に礎石を配置して建物跡を再現した。黄色い山土を運んできて分厚く埋めたことがよく理解できるようになっている。3層構造の分厚いガラス面は、1区画に大人15人が乗っても大丈夫な設計になっている。同様の地下展示は、佐賀県立歴史博物館や大阪歴史博物館などにあるが、それらにも決してひけをとらない、あっと驚く遺構展示設備になったのではないかと思う。ガラスの上に乗って見下ろすスリルが堪らないという方もいる。

### (6) 屋敷境の屋外展示

本館正面玄関に向かって右手の広場（暮らしの庭）の地下には、調査によって松平期の屋敷境の石



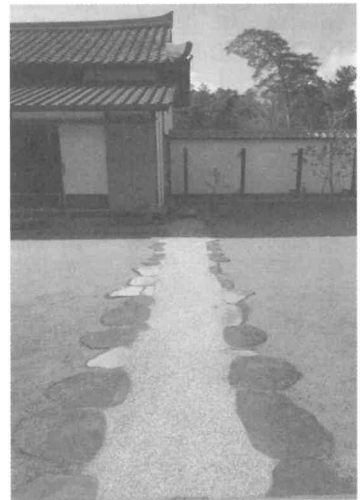
積溝が東西に走っていたことから、外構工事の中で何とか平面的にでも明示できないかと考えた結果、検出した石積溝跡の直上に薄桃色の大海崎石（安山岩）の輪郭を出土した石に倣い、上面は平らに加工して配列した。幅 60cm の溝本体は、表面小石混じりのモルタル仕上げとした。側に解説板を置いた。

(7) 出土瓦を採用した本館の屋根瓦

出雲地方に特徴的な左棧瓦が多数出土したので、約 6 万枚復元製作し本館の屋根に葺いた。又南屋敷第 2 面で出土したややひょうきんな顔の鬼瓦も復元製作され本館の降り棟の先端に飾られた。



出土瓦を復元し屋根に葺く

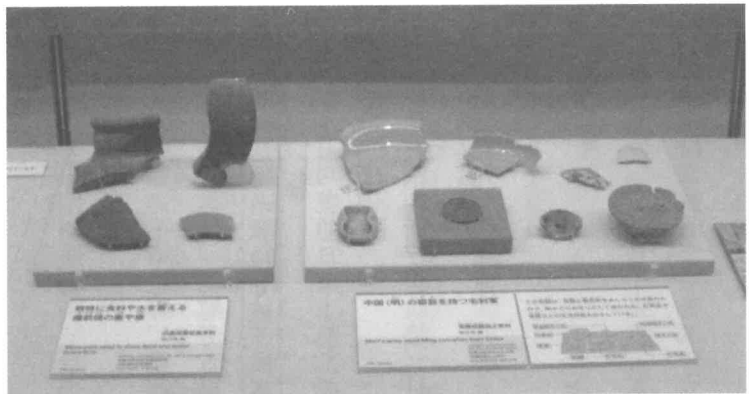


屋敷境の平面表示

5. 山城跡調査で出土、採集した遺物を展示 (図②)

当館では、基本展示室の壁面に沿って松江藩の歴史の流れを展示しているが、中世末の「開府以前の松江」のコーナーで、毛利氏が、尼子氏の本拠地・広瀬の富田城攻めの向城として築いた「荒隈城」跡から出土した中国・明代の青磁、白磁の輪花皿、中国青花の碗、鏡、土師質土器の箸置、灯明具を展示した。特に鏡は、陣中でのお守り（護身）用の小型の貴重なものであり、緋色の毛氈の上に置いた。

一方、尼子方の重要拠点「白鹿城」跡はまだ発掘調査はされていない。これまで縄張りなど踏査した折に採集された備前焼の壺、水屋甕、青磁小皿を展示した。特に、水屋甕の破片はそのまま置いては形状がよく分からないので、透明プラスチックの支え具で上下を合わせて固定し、形を見やすくした。



白鹿城跡、荒隈城跡の出土品を展示

(参考文献)

1. 『松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）発掘調査報告書』2011 年 3 月、島根県松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
2. 『雲州松江の歴史をひもとく—松江歴史館展示案内』松江歴史館、2011 年 3 月
3. 『江戸時代へ行こう！—松江城下町ものがたり』平成 23 年冬の企画展展示図録、松江歴史館、2011 年 12 月
4. 「松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理」大塚享義（『松江歴史館研究紀要』第 3 号、2013 年所収）  
（おかざき・ゆうじろう 元松江歴史館顧問）